

第7回 球磨川下流域環境デザイン検討委員会

萩原堤防のデザインについて

参考資料



施設整備方針

施設等	整備方針
1.拠点配置	1-1 石はねや記念碑などを活用し、水辺の拠点を適度な間隔で配置する。
2.堤防天端	2-1 堤防天端に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。 2-2 堤防天端に交通安全施設を整備し、利用する自転車・歩行者の安全を確認する。
3.法面	3-1 全国花火競技大会の観覧席として利用できるよう法面は緩やかな勾配とする。 3-2 高齢者をはじめとして誰もが安心して水辺に近づける経路をスポット的に整備する。
4.低水敷	4-1 低水敷に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。
5.石はね	5-1 堤防の機能を確保したうえで、当時の石はねを復元する。
6.河畔林	6-1 水衝部の堤防の保護及び多様な動植物の生息環境保全のため、現状の河畔林を保全・管理する。 6-2 拠点周辺の河畔林は、低水敷から水面への眺望及び水際の利用者の安全面に配慮する。

施設整備方針

施設等	整備方針
7.サイン	7-1 堤防から眺望できる歴史文化施設の説明サインや案内サインを充実させ、施設への誘導効果の向上を図る。 7-2 近隣の地域資源や交通アクセスへの案内を充実させ、川とまちの一体的な回遊行動を誘導する。
8.並木	8-1 堤防の機能を確保したうえで、八代八景に歌われた当時の並木を復元する。
9.駐車場・駐輪場	9-1 自動車でのアクセスに配慮して、拠点に近接した位置に駐車場を整備する。 9-2 各拠点には自転車利用者のための駐輪場を整備する。
10.乗船場	10-1 遊覧船、屋形船、筏、ボートなどが離着岸できる施設を下流部の拠点に整備する。

1. 拠点配置

八代駅を起点として遥拝堰までの区間を周遊できる飽きのこないデザインとする(利用)

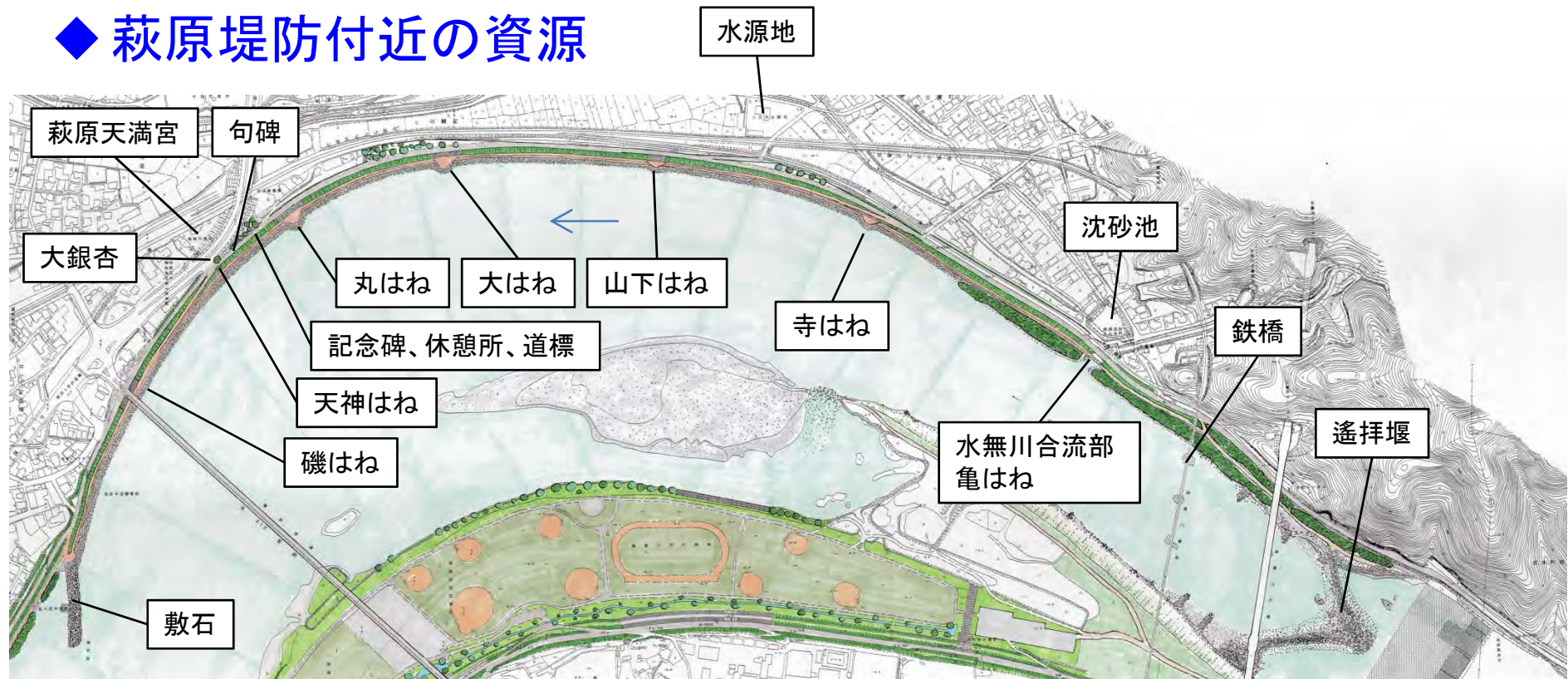
1-1 石はねや記念碑などを活用し、水辺の拠点を適度な間隔で配置する。

委員会の意見

【具体的な方策に関する意見】

- 拠点5と遥拝堰の間に結節点があるとよい

◆ 萩原堤防付近の資源



敷石(旧前川堰)



大銀杏

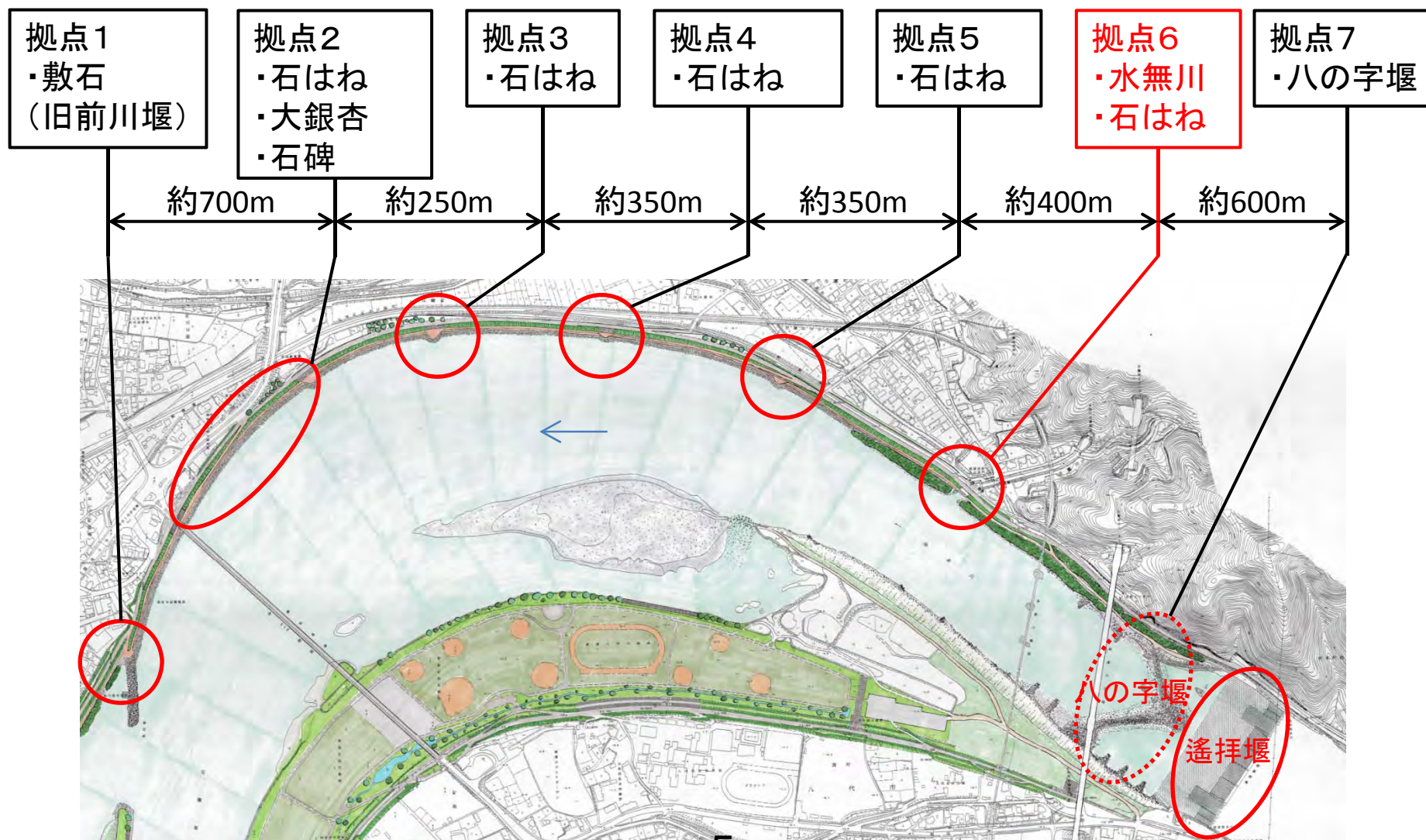


句碑(種田山頭火)



記念碑(宮崎八郎戦没之碑)

1-1 石はねや記念碑などを活用し、水辺の拠点を適度な間隔で配置する。



2.堤防天端

八代駅を起点として遥拝堰までの区間を周遊できる飽きのこないデザインとする(利用)

- 2-1 堤防天端に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。
- 2-2 堤防天端交通安全施設を整備し、利用する自転車・歩行者の安全を確認する。

地元及び委員会の意見

【方向性に関する意見】

- 萩原堤と遥拝堰がつながり散策路が連続するととてもよい
- 通路は同一ルートの往復とならないようにする

【具体的な方策に関する意見】

- 河口から遊歩道、自転車道がつながるとよい
 - 緑の回廊が八代駅から球磨川までつながるとよい
- <右岸(萩原堤防)>
- 右岸に木陰があるとよい
- <共通>
- 堤防天端の川側にガードレールがほしい
 - 堤防天場に街灯がほしい

◆ 萩原堤防の利用状況

- ・ 兼用道路（市道）となっており、通勤通学路として利用されている。
- ・ 日常の散策やジョギング等に利用されている。
- ・ 堤防天端道路は、歩行者と車両とが分離されておらず、利用者が危険である。
- ・ 新萩原橋上流側の小段は草本類が鬱蒼と繁茂しており、利用者がほとんど見られない。



a. 堤防天端の日常的な利用



b. イベント時の観覧場としての利用



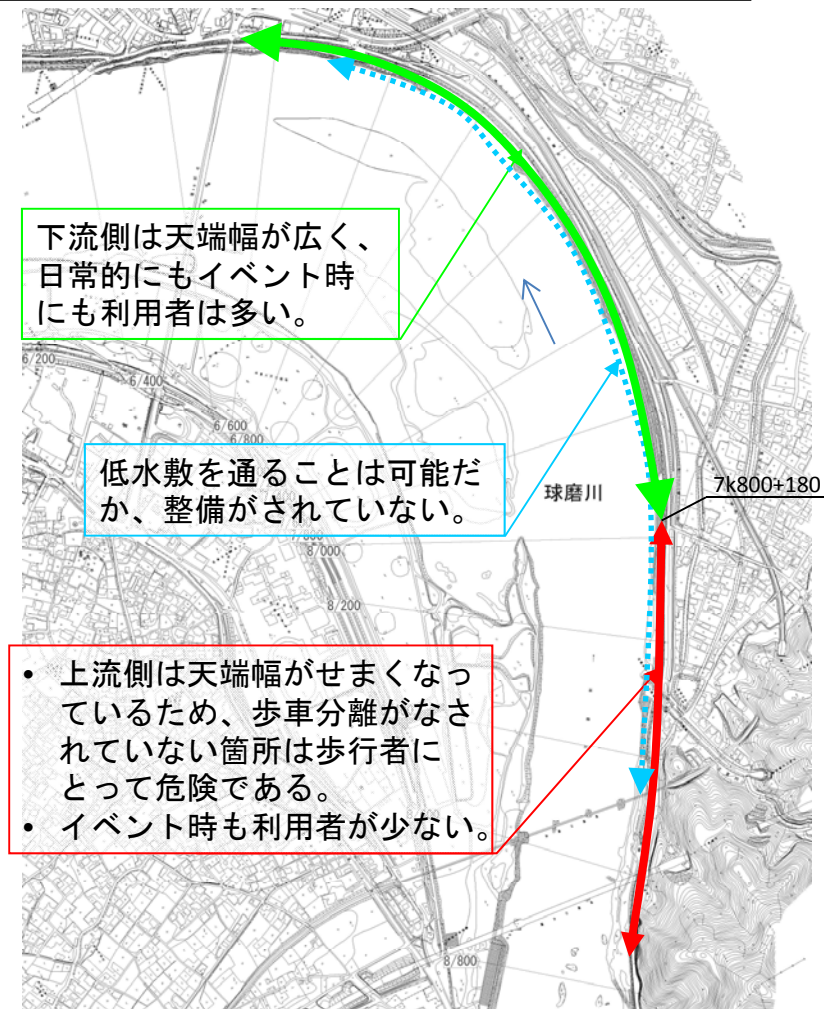
d. 整備がされていない小段の様子



c. 歩車分離がなされていない堤防天端

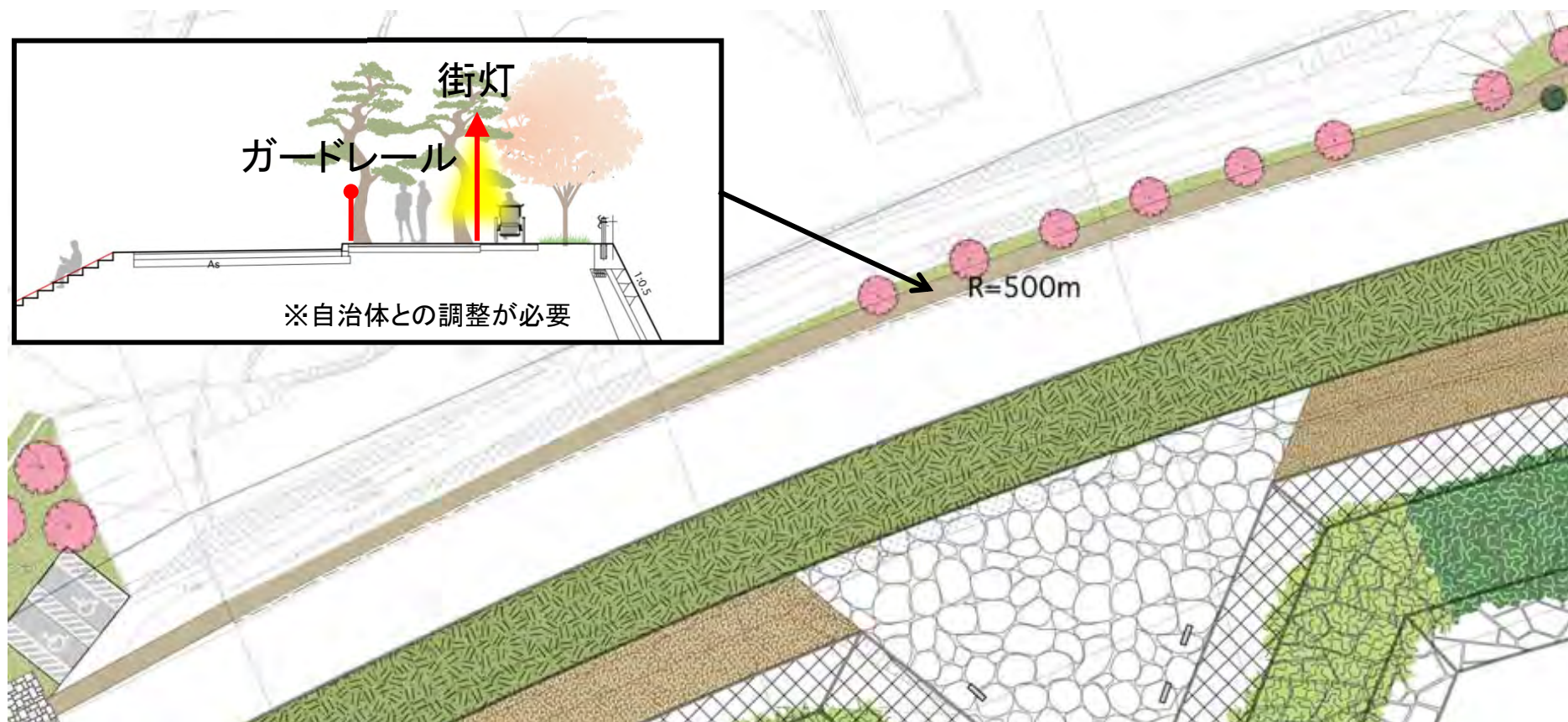


d. 小段沿いに繁茂する樹木



施設整備方針

- 2-1 堤防天端に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。
- 2-2 堤防天端に交通安全施設を整備し、利用する自転車・歩行者の安全を確保する。



3.法面

子どもから高齢者まで誰もが安全に川に親しめるデザインとする(利用)

全国花火競技大会やくま川祭り等のイベント時の利用に配慮したデザインとする(利用)

3-1 全国花火競技大会の観覧席として利用できるよう法面は緩やかな勾配とする。

3-2 高齢者をはじめとして誰もが安心して水辺に近づける経路をスポット的に整備する。

地元意見

【具体的な方策に関する意見】

＜右岸(萩原堤防)＞

- ・ 遥拝堰右岸下流の川に下りる道路があるとよい

＜共通＞

- ・ バリアフリーのスロープがほしい、堤防から川に下りるスロープがほしい
- ・ 堤防法面は緩斜面の一枚法がよい、堤防法面は緩斜面にしアクセスを容易にする

＜花火大会＞

- ・ 花火大会の観覧席になる施設がほしい、花火大会の観覧場所がほしい

◆ 萩原堤防の水辺へのアクセス

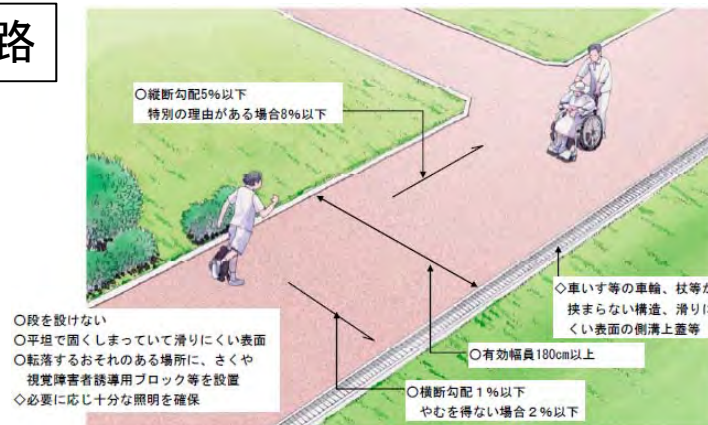
- 堤防天端から高水敷までのアクセスは、急な階段か未舗装の斜路となっている。
- 高水敷から水面にアクセス可能な場所は、漁業船舶の係留場所周辺のみとなっている。



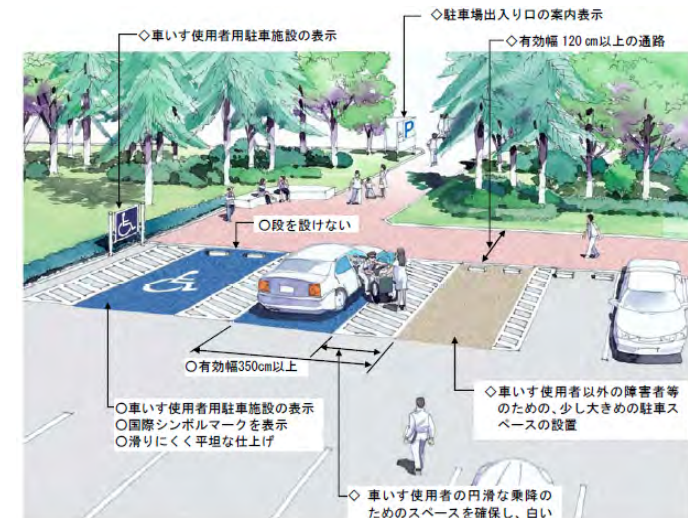
◆ 都市公園移動等円滑化基準

- 都市公園のバリアフリー化に関する標準的な整備内容を「○」、望ましい整備内容を「◇」で示す。

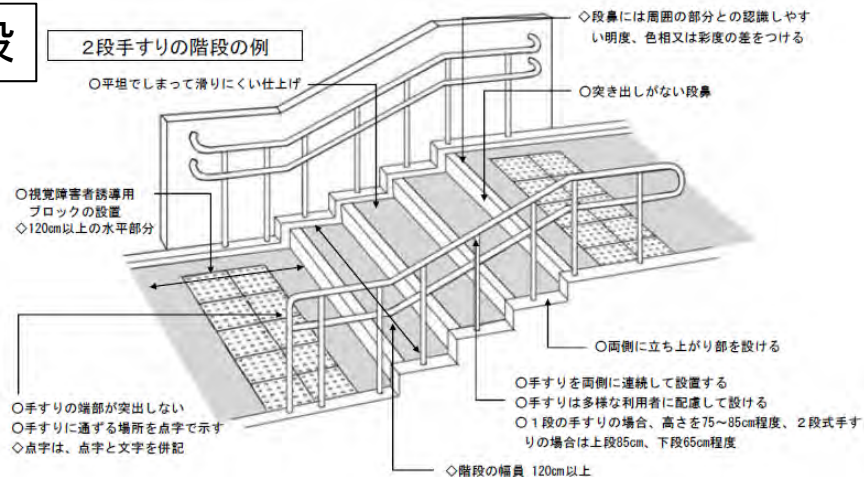
園路



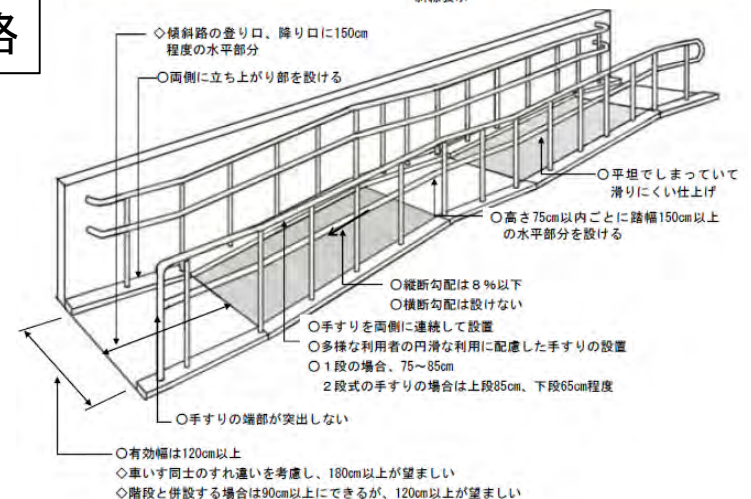
駐車場



階段

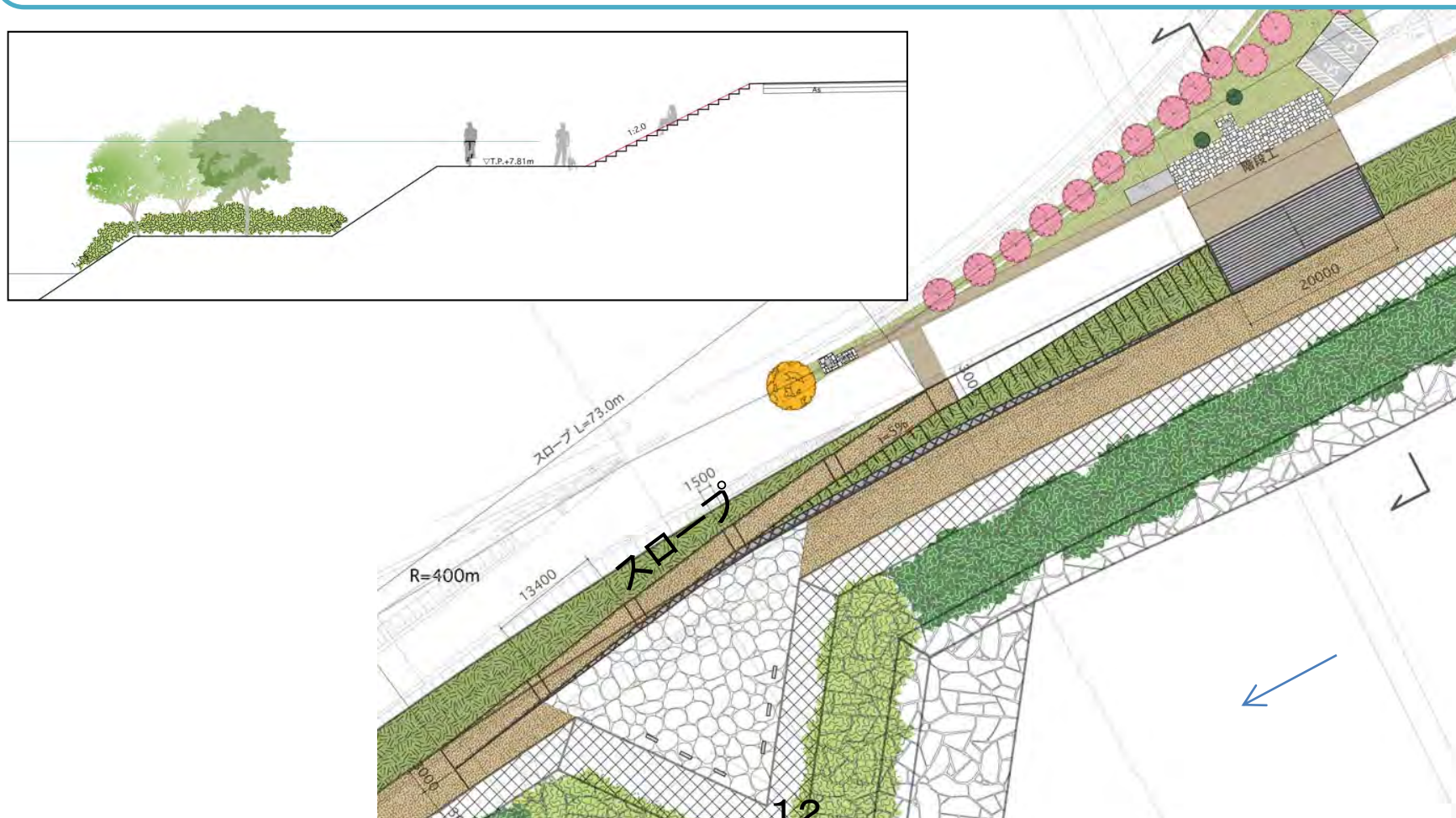


傾斜路



施設整備方針

- 3-1 全国花火競技大会の観覧席として利用できるよう法面は緩やかな勾配とする。
- 3-2 高齢者をはじめとして誰もが安心して水辺に近づく経路をスポット的に整備する。



4.低水敷

八代駅を起点として遥拝堰までの区間を周遊できる飽きのこないデザインとする(利用)

4-1 低水敷に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。

地元及び委員会の意見

【方向性に関する意見】

- ・ 萩原堤と遥拝堰がつながり散策路が連続するととてもよい
- ・ 通路は同一ルートの往復とならないようにする

【具体的な方策に関する意見】

- ・ 河口から遊歩道、自転車道がつながるとよい
- ・ 緑の回廊が八代駅から球磨川までつながるとよい
- ・ 国道3号を渡るところに結節点を設け新萩原橋の下を通るようにする
- ・ 高水敷を整備して散策路を確保

◆ 萩原堤防の自転車・歩行者空間

高水敷は未舗装であり、大部分は草木類が鬱蒼と繁茂している。



堤防天端は、車線のない対面通行となっており、車のスピードも速く危険。



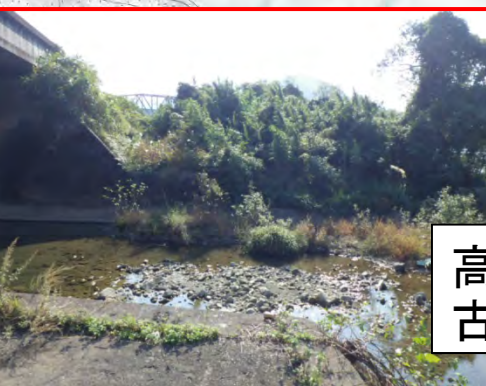
古麓川合流部より上流は、路肩がほとんど無い。



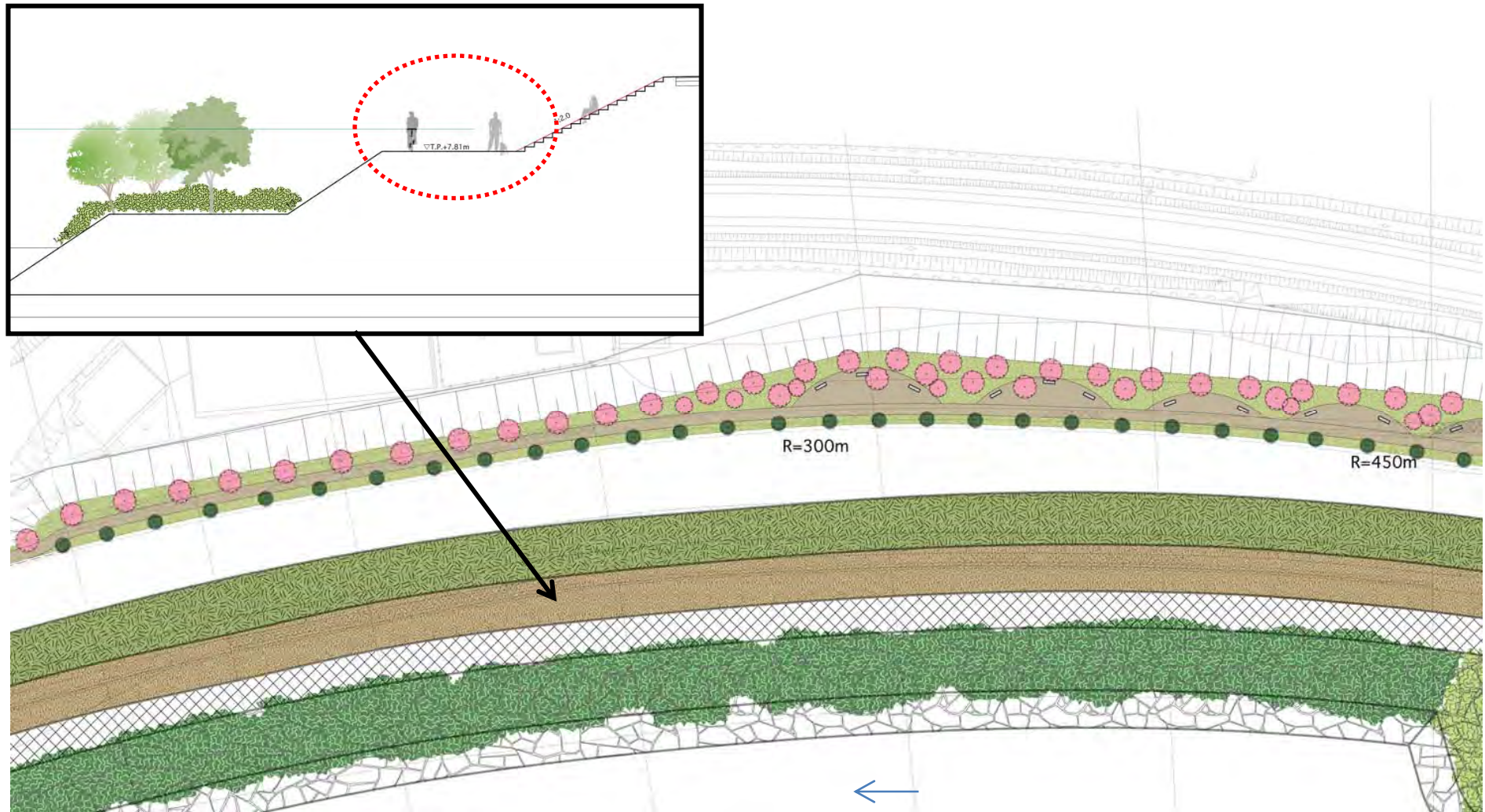
前川の堤防上に自転車歩行者道が整備されている。



高水敷は概ね連続しているが、古麓川合流部で分断されている。



4-1 低水敷に連続した自転車歩行者道を整備し、水辺の拠点をつなぐルートを確認する。



5. 石はね

川への眺望に配慮しながら、八代八景に歌われた“萩原堤”の再生を目指す空間デザインとする(歴史・文化・景観)

5-1 堤防の機能を確保したうえで、当時の石はねを復元する。

地元意見

【方向性に関する意見】

- 球磨川らしい歴史が感じられる川にしたい
- 石はねの風景があるのが良い

◆ “名勝萩原堤”の景観(石はね)

- 元禄3年(1619)に築堤した際、洪水から堤防を守るために「石はね」が施工された。

昭和30年撮影



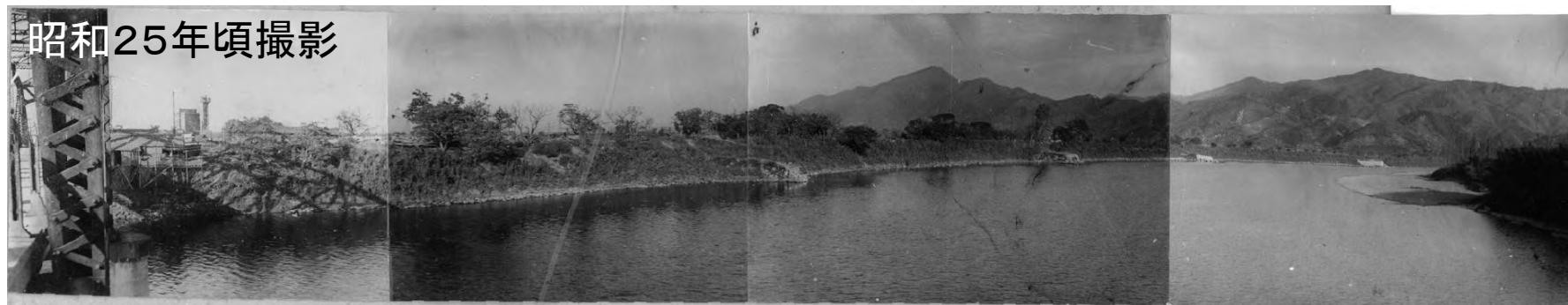
昭和33年撮影



昭和33年撮影



昭和25年頃撮影



◆ 石はねの保存状況

- ・ 球磨川石はねは7基存在していたが、最上流の石はねは水無川の改修時に撤去されている。
- ・ オリジナルの石積みが残されている＝全国的にも貴重(例えば、信玄堤(長野県)や太閤堤(宇治川)の石垣は後世に大規模な改変を受け、オリジナルは残っていない)
- ・ 加藤時代に造られ、細川時代に補修を受けながら水制として機能。(水流を7基のはねで受け流し分散させる)
- ・ 球磨川はねは平面不等辺三角形を呈し、数基のはねで河川流に対処する全国的に珍しい構造。



根元部分は消失。先端部分は保存されている
(地元住民聞き取り:現地未確認)

根元部分は消失。先端部分は保存されている
(地元住民聞き取り:現地未確認)

根元部分は、堤防内部に至る部分まで保存されている。割石乱積み
はねに沿って根固ブロック配置
はね天端は石張りはない。一部モルタル張り(※上部は水平に開削された?)
石材:石灰岩主体

矢穴痕(11cm×6cm)から、江戸時代初頭に積まれたものと考察。また、明治期の豆矢跡、昭和以降のロッド痕が残る。⇒ 球磨川の水制としての機能を維持していたことの証明
上流側:築石の裏側に「裏留め石」を配置。裏留め石は、はね内部への侵入水による土塁の流失を防止するもの ⇒ 水圧に耐える工夫(城郭石垣と河川構造物石垣との違いを示すもの)
石材:石灰岩主体

参考資料

◇八代市資料(球磨川はね発掘調査に係る調査指導について)

◇八代市資料(球磨川河川改修事業に伴う球磨川はねの確認調査報告書)

◆ 石はねの保存状況



江戸初期に築かれ、補修を受けている(矢跡形状から江戸時代中期と推定)

上流側: 築石の裏側に「裏留め石」を配置。裏留め石は、はね内部への侵入水による土塁の流失を防止するもの ⇒ 水圧に耐える工夫(城郭石垣と河川構造物石垣との違いを示すもの)

はねの先端は、江戸時代の補修時に造られたと推定。天端の稜線が鈍角。
石材: 石灰岩少なく堆積岩等が主体

矢穴痕(12cm×12.5cm)から、江戸時代初頭に積まれたものと考察。2回の補修が認められる(石材の積み方から、1回目は江戸時代(細川時代前半頃)、2回目は幕末から明治初頭と考察) ⇒ 球磨川の水制としての機能を維持していたことの証明

石材: 石灰岩少なく堆積岩等が主体

課題

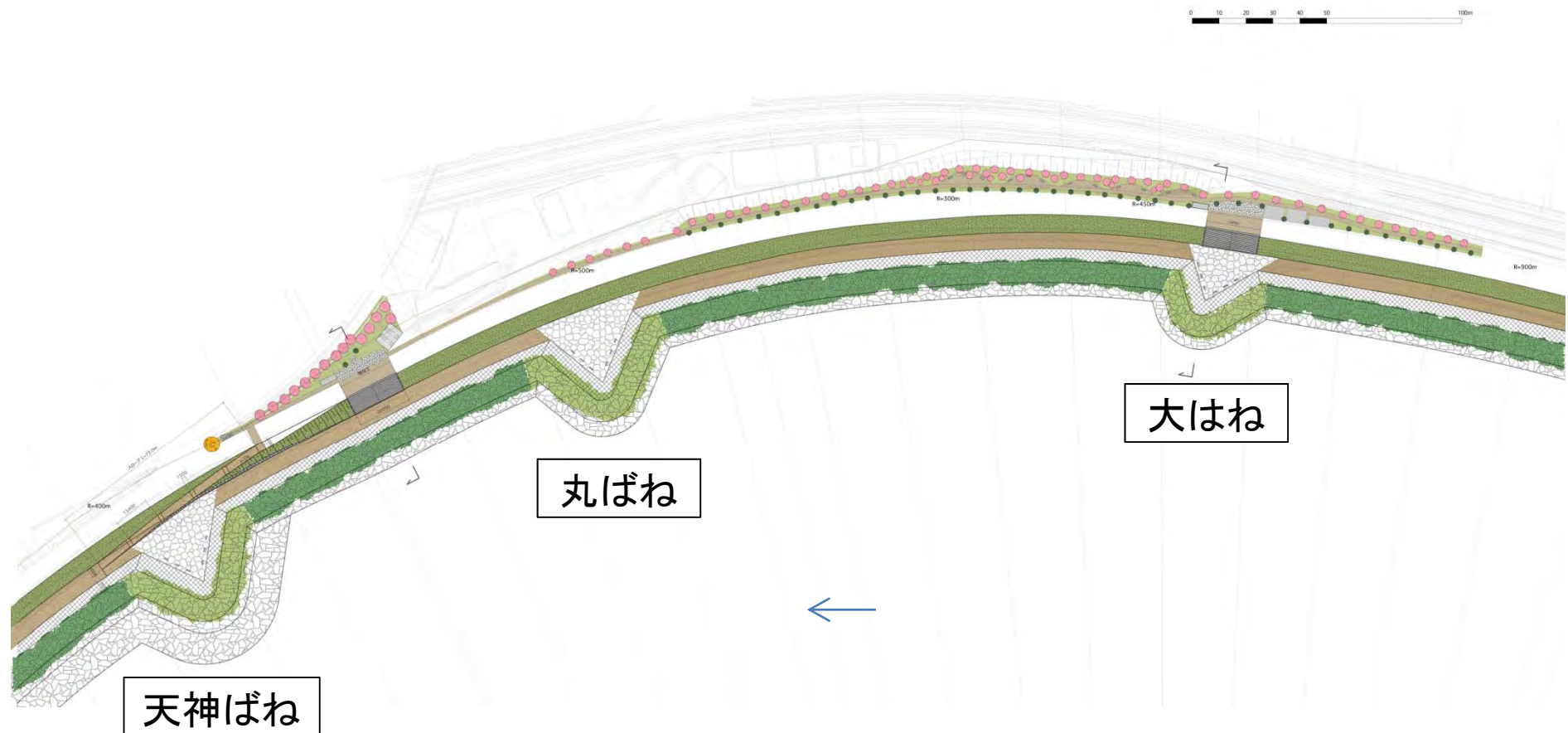
- “のこし”: 洪水時に遊水地に水を導く施設(必ずはねとセットになっている)が不明
- はねの図面(堤防やはねは詳細な図面が残されていることが多い: 長青文庫?)

参考資料

◇ 八代市資料(球磨川はね発掘調査に係る調査指導について)

◇ 八代市資料(球磨川河川改修事業に伴う球磨川はねの確認調査報告書)

5-1 堤防の機能を確保したうえで、当時の石はねを復元する。



6.河畔林

水辺の生物や植物を守り育てる河畔林のデザインとする(環境)

子どもから高齢者まで誰もが安全に川に親しめるデザインとする(利用)

- 6-1 水衝部の堤防の保護及び多様な動植物の生息環境保全のため、現状の河畔林を保全・管理する。
- 6-2 拠点周辺の河畔林は、低水敷から水面への眺望及び水際の利用者の安全面に配慮する。

地元意見

【方向性に関する意見】

- 親水性と生物の棲息場のバランスをとってほしい
- 右岸は流速が早く子どもの水遊びには不適
- 治水を第一に丈夫な堤防にしてほしい
- 萩原堤防で一番大事なものは防災である

【具体的な方策に関する意見】

- 根固工の空隙は魚類の生息環境に適す
- 河畔林は魚類の生息環境に必要
- ウナギの生息環境を整備してほしい
- 花火鑑賞のための河畔林を伐採、花火鑑賞のためヤナギを伐採
- 水辺に近づけるよう竹林を伐採してほしい
- 石はねの防災役割と景観を考えてほしい

◆ 石はねの水制機能

- 水衝部にあたる現在の新萩原橋付近から上流は、7ヶ所の強固な不透過水制「はね」を備えた半環状の大塘である。
- 巧みな石はね水制は、それぞれ堤脚取付部の角度を少しずつ変え、洪水時の激流をいずれも流心部へ跳ね返すよう工夫されている石張りの強固なものである。

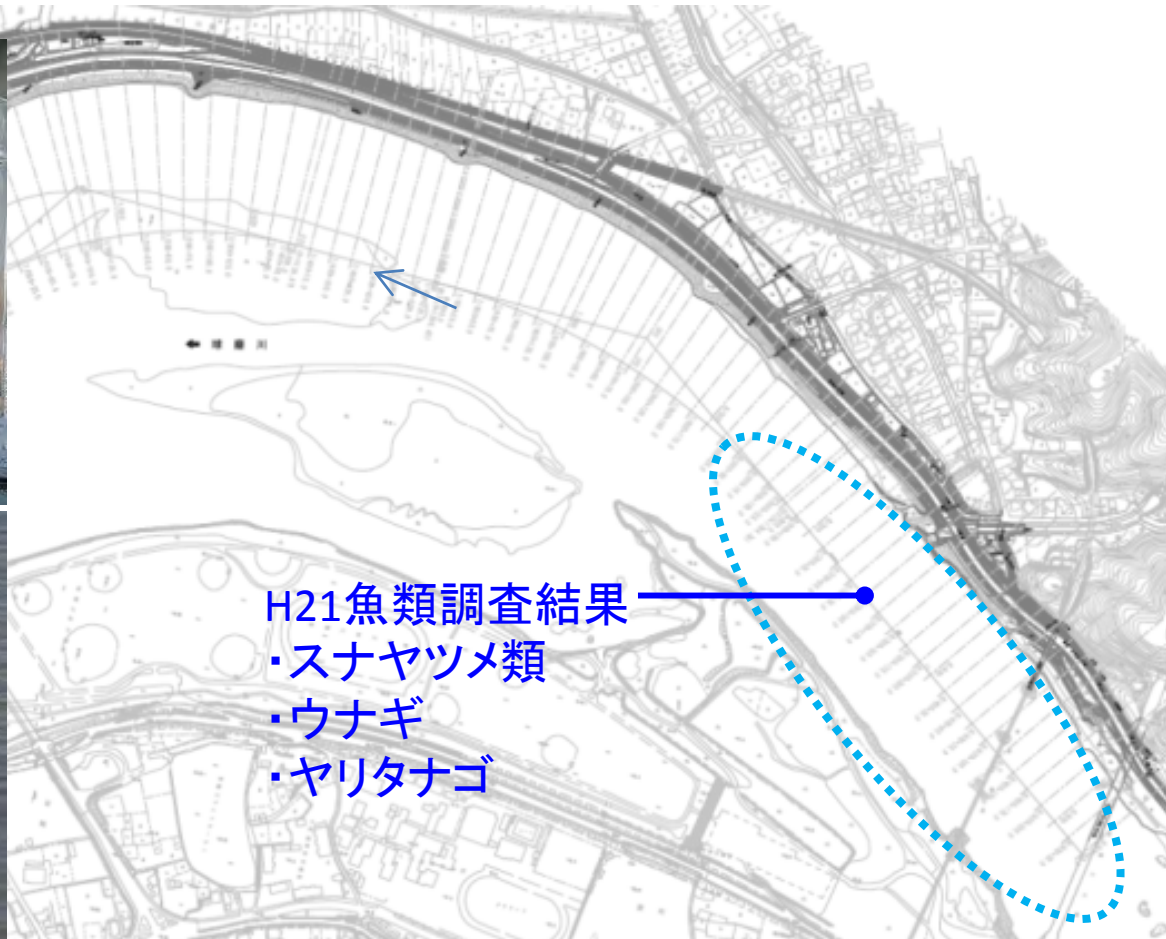


はね石：清正の巧みな治水技術として有名なはね石。清正は萩原堤の水衝部にこの石はねを設け、水の流れを流心に向かわせる工夫をした。



◆ 萩原堤防周辺の環境

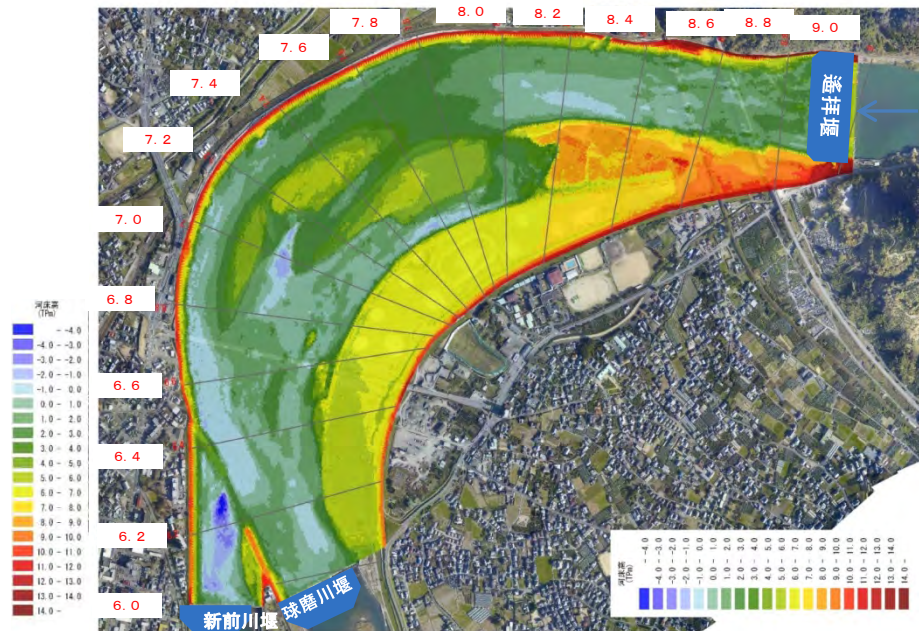
- 遙拝堰下流部にはウナギの棲息が確認されている。
- ウナギは、礫の間等を好むことから、多孔質な環境を創出することが重要となる。



◆ 河川の水深

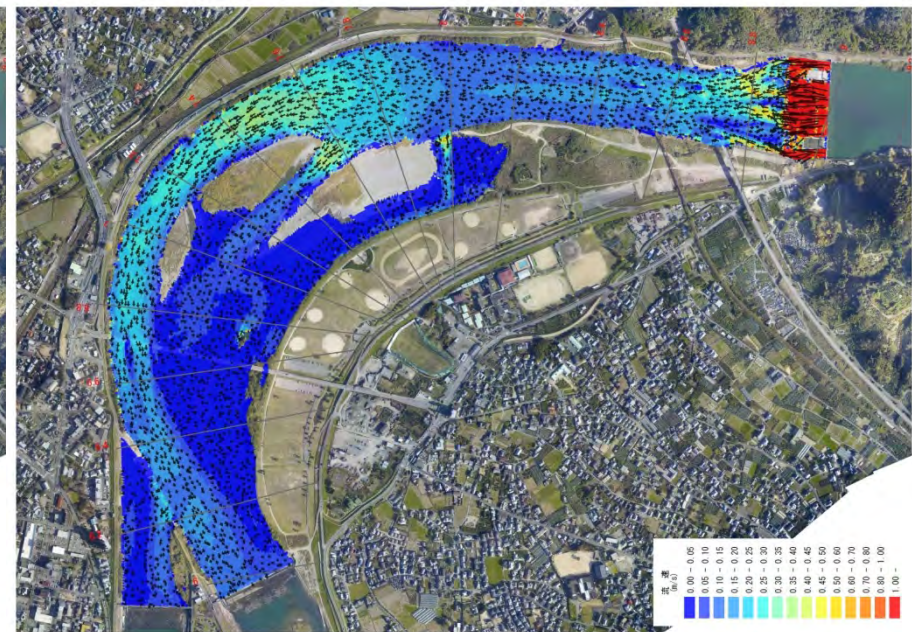
- 萩原堤防のある右岸側は、水深が深く流速も早くなっている。

【河床高】



河床高調査結果(平成23年度のマルチビーム測量による測定値)

【流速】



平常時(H24.9)の流速ベクトル(対策前)
流量: 約100m³/s
※横石流量から遙拝堰取水量を除いた値

◆ 河畔林の現況

- 堤防上からは水面が見渡せるが、低水敷に下りると、河畔林によって水面への眺望が遮られている。



【堤防天端からの眺め】



【低水敷からの眺め】

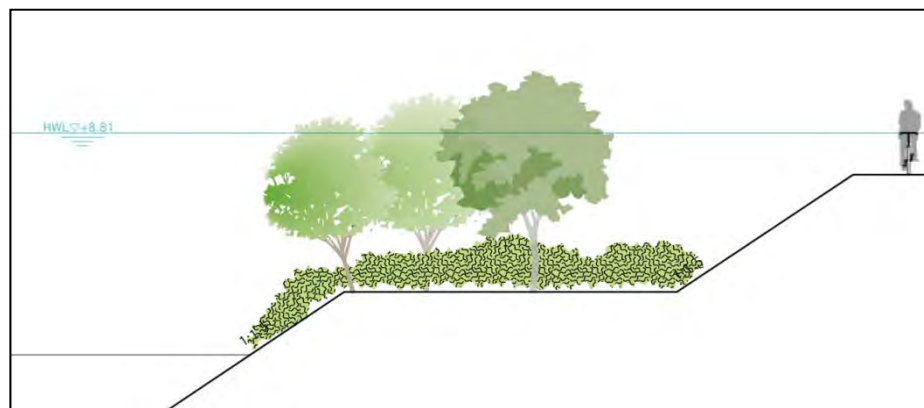
◆ イベント等の利用状況（花火大会）

- やつしろ全国花火競技大会の開催時は、萩原堤防が観覧席となる。堤防法面が急勾配であるため、転落防止柵が設置される。堤防天端は通行止めとなり、一般開放される。

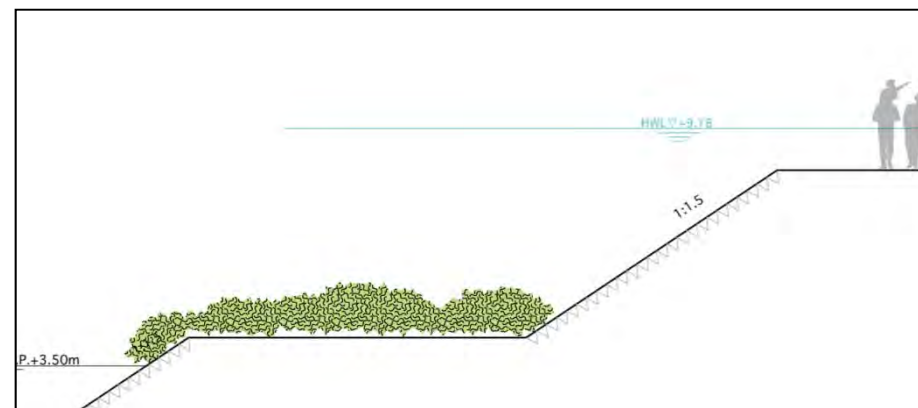


- 6-1 水衝部の堤防の保護及び多様な動植物の生息環境保全のため、現状の河畔林を保全・管理する。
- 6-2 拠点周辺の河畔林は、低水敷から水面への眺望及び水際の利用者の安全面に配慮する。

【一般部】



【水辺利用拠点】



7.サイン

八代駅を起点として遥拝堰までの区間を周遊できる飽きのこないデザインとする(利用)

- 7-1 堤防から眺望できる歴史文化施設の説明サインや案内サインを充実させ、施設への誘導効果の向上を図る。
- 7-2 近隣の地域資源や交通アクセスへの案内を充実させ、川とまちの一体的な回遊行動を誘導する。

地元意見

【方向性に関する意見】

- 球磨川らしい歴史が感じられる川にしたい
- 萩原堤と遥拝堰がつながり散策路が連続するととてもよい
- 通路は同一ルートの往復とならないようにする
- 石はねや古麓遺跡を見に人が来るようになるとよい

【具体的な方策に関する意見】

- 河口から遊歩道、自転車道がつながるとよい
- 緑の回廊が八代駅から球磨川までつながるとよい
- 右岸に史跡を歩きながら学べるガイダンス施設がほしい
- 古麓城跡の全容を見られるビューポイント(右岸大銀杏付近)にガイダンス施設がほしい

◆ 萩原堤防から歴史文化施設への眺望



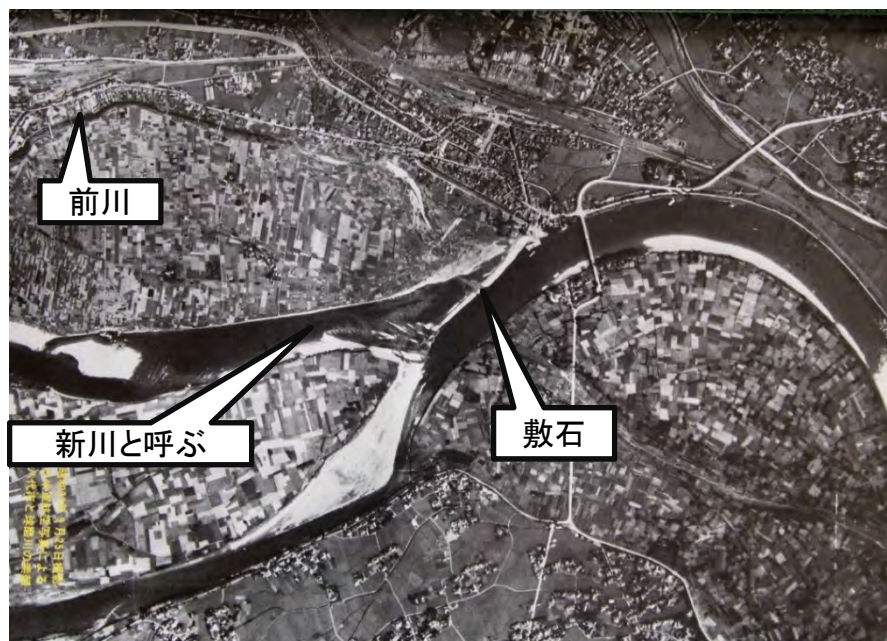
施設整備方針

新川と敷石

細川三(さん)斎(さい)は八代城下町を繁栄させるために新川の開さくと敷石の建設を行った。新川は現在の長さ1500メートル、幅約100メートル、野上と麦島の間を貫流し、その上流は旧萩原番所（豊国旅館のあったところ）下で球磨川本流と分岐し、下流は紺屋町前面で前川に注いでいる。『八代市史』第4巻、蓑田田鶴男著の中には、「この川は水が割合に浅く、傾斜が急であるため、全体として浅瀬をなしていることが特徴である。これを新川というのは、細川三斎が八代在城14年間の遺業の一つで、入城第3年の寛永11年（1634）春、麦島三角州を開さくさせて作った運河だからで、340年前のことである。それまでは、野上と麦島の洲はひと続きの半島で、徳の渚を抱いていたのを、はじめ加藤正方が、はぜ塘下を掘って前川にし、今度三斎により野上・麦島の間を運河にして、徳の渚を新川……前川という、球磨川の支流にかえたのである。」と記されている。

新川は「舟筏の便を通ずる」目的でつくられ、中流の松求麻村（現坂本村）より木材・炭・薪・楮などを舟筏で運んでいた。毎年の洪水時に、前川堤は新川からくる奔流をまともに受け、前川の船着きは浅くなり堤防は危険なめにあった。このため藩主忠利は三斎の請いにより、大理石の石をもって新川の分岐点に一大石堤を築いてこれをしめきった。これを「萩原の敷石」とよんでいる。敷き石堰は球磨川の流れを平常は新川をしめ切り、洪水時は越し水が前川に入る仕組みである。工事は百余日はかかったものと考えられる。

文政12年（1829）5月、松井(まつい)督(ただ)之(ゆき)のころに、この敷き石の中央から少し南よりのところ20メートルを切り開き、再び舟や筏を通すことにした。しかし昭和12年からの球磨川改修工事は閉める方向に進み、昭和40年6月中旬から7月3日にかけての豪雨で、球磨川は氾濫し、萩原敷き石上手の旧萩原番所跡石垣とその上の豊国旅館の流失などをみて、昭和42年に球磨川本流に球磨川堰、前川に新前川堰が新設された。



旧前川堰（萩原の敷石）

八代城下を洪水から防護するために、派川前川の分派口に設けられた分流規制堰であるが、同時にかんがい取水堰の効用を兼ね、前川の流入口付近に石灰石系の白石で築いた長さ120間（約218m）の固定堰で、その高さは当時平水面から6～7尺（1.8～2.1m）以上もあり前川には容易に水が落ちないようにされていました。下町は前川の右岸沿に発達しているので、洪水の流入を制御すると同時に前川河口の蛇籠港を維持するため土砂の流入を制御したものとみられます。

施設整備方針

古麓城（国指定史跡「八代城跡群 古麓城跡 麦島城跡 八代城跡」及び市指定史跡）

【歴史】

古麓町上り山一帯は、南北朝時代から戦国時代末まで250年余りの間、山城がありました。この山城は現在、古麓城跡と呼ばれていますが、当時は八代城と呼ばれていました。

建武元年(1334年)に名和義高（なわよしとか）が八代荘の地頭に任じられ、翌年には代官として一族の内河義真（うちかわよしざね）が下向し、南北朝の争乱に備えて築城したと伝えられます。正平3年（1348年）には、「八代城（現在の古麓城跡。以下、古麓城）」が文献に初めて登場します。

古麓城を中心に八代を治めていた名和氏と、人吉・球磨地方を拠点とする相良氏は、交通の要衝である八代地域をめぐって争っていました。

室町時代の文明16年(1484年)に相良為統（さがらためつぐ）は古麓城を落城させて名和氏を追放しましたが、明応8年（1499年）に肥後国守護職の菊池能運（きくちよしゆき【よしかず】）の援助によって名和顕忠（あきただ）が八代に復帰しました。しかし、永正元年(1504年)に相良長毎（ながつね）が古麓城に入城して八代を領地とし、天文3年（1534年）に相良長唯（ながただ）によって城の大規模な整備と城下町の整備が行われました。

天正9年(1581年)には響野原で相良義陽（よしひ）が戦死して島津氏の領地となり、翌10年に島津氏は肥後に侵攻し、島津義弘（よしひろ）を守護代に据え、古麓城には平田光宗が常駐することとなりました。

しかし、天正15年(1587年)の豊臣秀吉による九州攻めによって、島津氏は八代から退却し、薩摩に戻りました。九州攻めの最中の4月19日には豊臣秀吉が古麓城に入城し4日間滞在し、キリスト教の宣教師ルイス・フロイスの面会も受けました。九州攻めの後、肥後は佐々成政（さっさなりまさ）の領地となりましたが、佐々は国衆一揆の責を負わされて切腹しました。その後、八代は小西行長（こにしゆきなが）の領地となりましたが、行長は城を球磨川対岸の麦島に移したため、古麓城は廃城となりました。古麓城は、約250年もの長い間、八代地域の中心を担っていました。

【構造】

古麓城は古麓一帯の山頂を数段に削平した山城で、複数の城で構成されています。各城は曲輪の近くに堀切と堅堀を設け、山の麓に水堀を巡らせ、城下町を取り囲むように水無川を利用して総構えが設けられていたと考えられています。

■名和氏時代・・・①～⑤の5城で構成。

①飯盛城（いもりじょう）※主城

②丸山城（まるやまじょう） ③鞍掛城（くらかけじょう）

④勝尾城（かちおじょう） ⑤八丁嶽城（はっちょうだけじょう）

■相良氏時代・・・文亀4年(1504年)に相良長毎が入城。主城は鷹峰城。

【史跡】

指定・・・・・・・・国指定史跡「八代城跡群 古麓城跡 麦島城跡 八代城跡」
及び市指定史跡「古麓城跡」

種別・・・・・・・・記念物・城跡

指定年月日・・・・国指定：平成26年3月18日 市指定：昭和40年4月12日



出典：八代市ホームページ

施設整備方針

遙拝堰

球磨洲の河口に近い遙拝堰は中世杭瀬と呼んでいた。名和・相良氏時代に川水をかんがい用水として取り入れるため、川中に杭を打ちこんで水流をせきとめる設備であった。この杭瀬は川の中を中心に八字形の石堰に改造したのが加藤氏時代で堰の両側には大きな溝渠を掘って水を通じ、その取入口に二重の樋門を造って洪水時に備えた。名和頭(あき)興(おき)が館(やかた)を杭瀬に構えたという記録に見え、南北朝の後半に杭瀬という名の用水堰があって八代平野の水田をかんがいた。八代荘は名和氏の穀倉であり、高田郷・太田郷の郷村制成立とともに、川北に太田井手・川南に奈良木井手ができた。

そして加藤時代になって大形の自然石や割り石を積んだ八字堰が構築された。この遙拝堰もあい続く球磨川の氾濫で崩れたが、そのつど修繕と補強が施され、江戸末から明治・大正・昭和になって昭和22年から23年にかけて農林省の直営となり、近代工法によった遙拝堰が完成した。

昭和38年7月、大洪水被害復旧費6千万円といういたいたしい経験にかんがみ、堰のすぐ上方に農・工業用水を豊富にとり入れることのできる新堰が農林省の国営事業でつくられた。新遙拝頭首工は国営八代平野土地改良事業と熊本県工業用水道事業との共同工事として昭和44年3月完成した。



出典:球磨川教材化資料集(第二集)ふるさと八代球磨川



現在の遙拝堰



旧遙拝堰

◆萩原堤防周辺の地域資源



◆ 萩原堤防周辺の地域資源



出典:「やつしろしウォーキングマップ」八代市

宮地の名所マップ

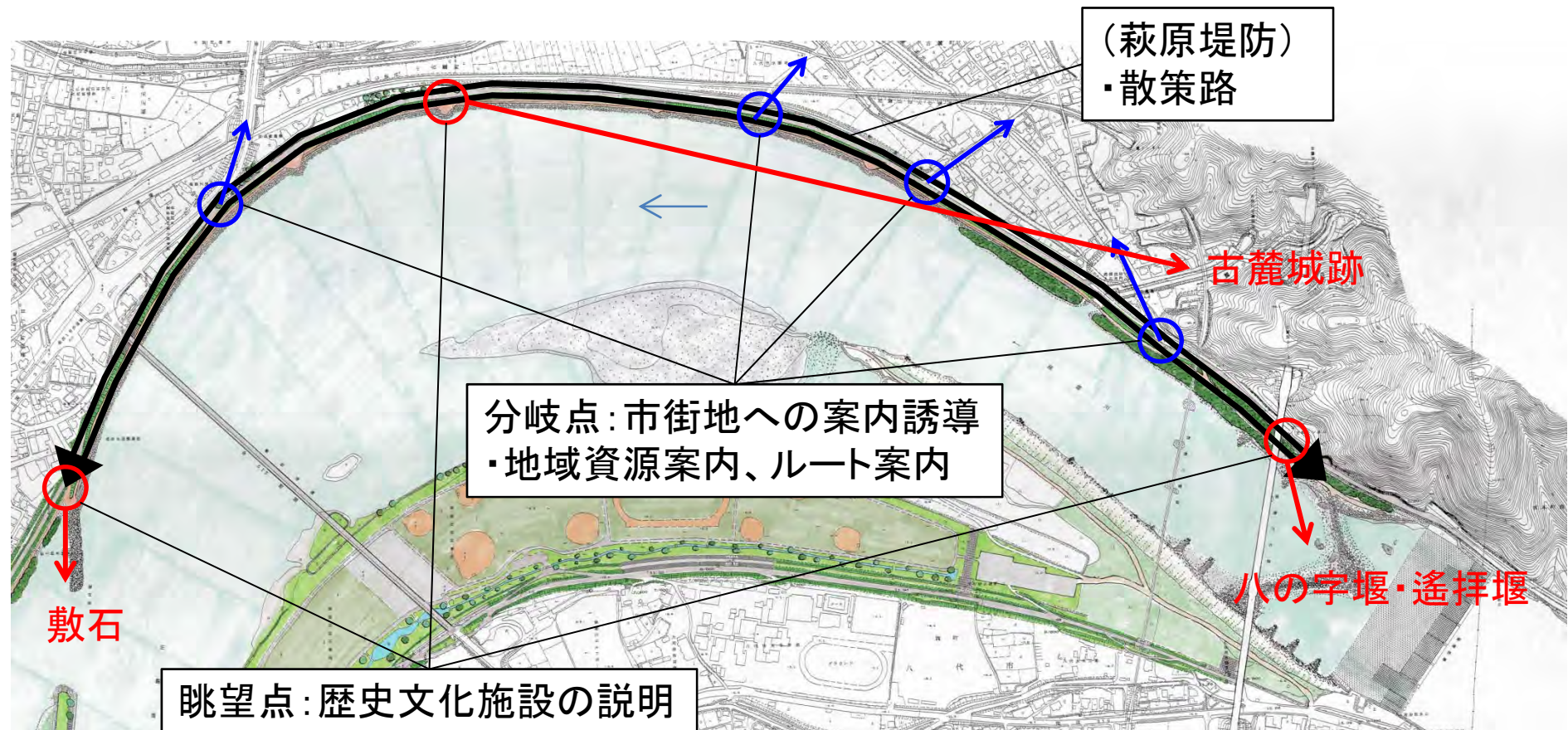
宮地にはたくさんの歴史的名所があります。是非、お出かけください。



出典:「宮地の名所」NPO法人とら太の会

施設整備方針

- 7-1 堤防から眺望できる歴史文化施設の説明サインや案内サインを充実させ、施設への誘導効果の向上を図る。
- 7-2 近隣の地域資源や交通アクセスへの案内を充実させ、川とまちの一体的な回遊行動を誘導する。



8.並木

川への眺望に配慮しながら、八代八景に歌われた“萩原堤”の再生を目指す空間デザインとする(歴史・文化・景観)

8-1 堤防の機能を確保したうえで、八代八景に歌われた当時の並木を復元する。

地元意見

【方向性に関する意見】

- ・ 球磨川らしい歴史が感じられる川にしたい

【具体的な方策に関する意見】

- ・ 右岸堤防の川裏に並木を復元、右岸に昔の並木を復元してほしい

◆ 八代八景

- 八代八景は、加藤正方(1580-1648)の時代と松井直之(1638-1692)の時代に詠まれているが、名勝“萩原堤”は加藤正方の時代に詠われている。
- 松井直之の時代になり、萩原堤の松並木も大きく生育し、松堤と石はねがおりなす景観は歌や絵にも描かれる景勝地となった。

天保7年(1836)に描かれた球磨川絵図



松井直之が詠った八代八景

1. 山家夜雨: さよふけてききしる雨のしつけさはふもとのいほの軒の玉水
2. 熊川秋月: く万川のみなそこ深きさされ石もあらはなるまですめる月かな
3. 遙拝晴嵐: 岩はしる瀬の音さやけしふもと山あけほのくらくおろす嵐に
4. 松堤夕照: 木すえのみつつみったひそほの見へてゆふかけふれる松のむら立ち
5. 龍峰暮雪: ゆふつく日いりにしのちも龍が峰になほくれあへぬ雪の色かな
6. 妙見晩鐘: さそひ来るおともさやけし白木山あらしの末のいりあひのかね
7. 八代帰帆: 八代のおきつゆふしほさしつれてひまなく帰るあまのつり舟
8. 弘田落雁: 千町田に落るとみしは天草の島山こえし雁にかあるらむ

◆ “名勝萩原堤”の景観(並木)

- 元禄3年(1619)に築堤した際、堤防を補強するため松を植えた。
- この堤防は、別名「長堤」「松堤」「松塘」とも呼ばれた。
- 松が内側に植えられ、外側に桜並木があってよく調和していたが、松並木は終戦直後松食い虫で枯れた。



昭和13年撮影

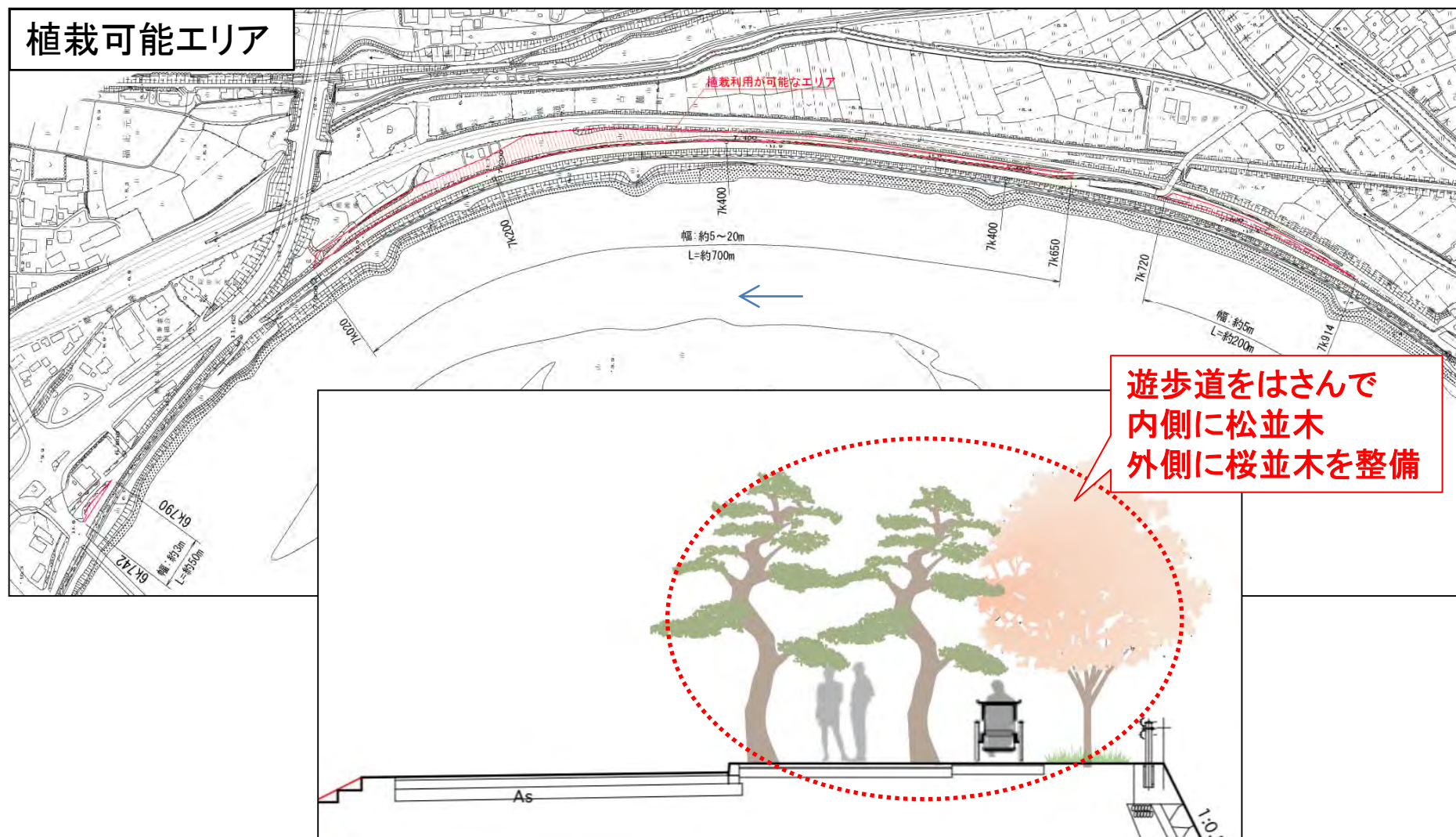


昭和30年撮影



昭和33年撮影

8-1 堤防の機能を確保したうえで、八代八景に歌われた当時の並木を復元する。



9. 駐車場・駐輪場

八代駅を起点として遥拝堰までの区間を周遊できる飽きのこないデザインとする(利用)

- 9-1 自動車でのアクセスに配慮して、拠点に近接した位置に駐車場を整備する。
- 9-2 各拠点には自転車利用者のための駐輪場を整備する。

地元意見

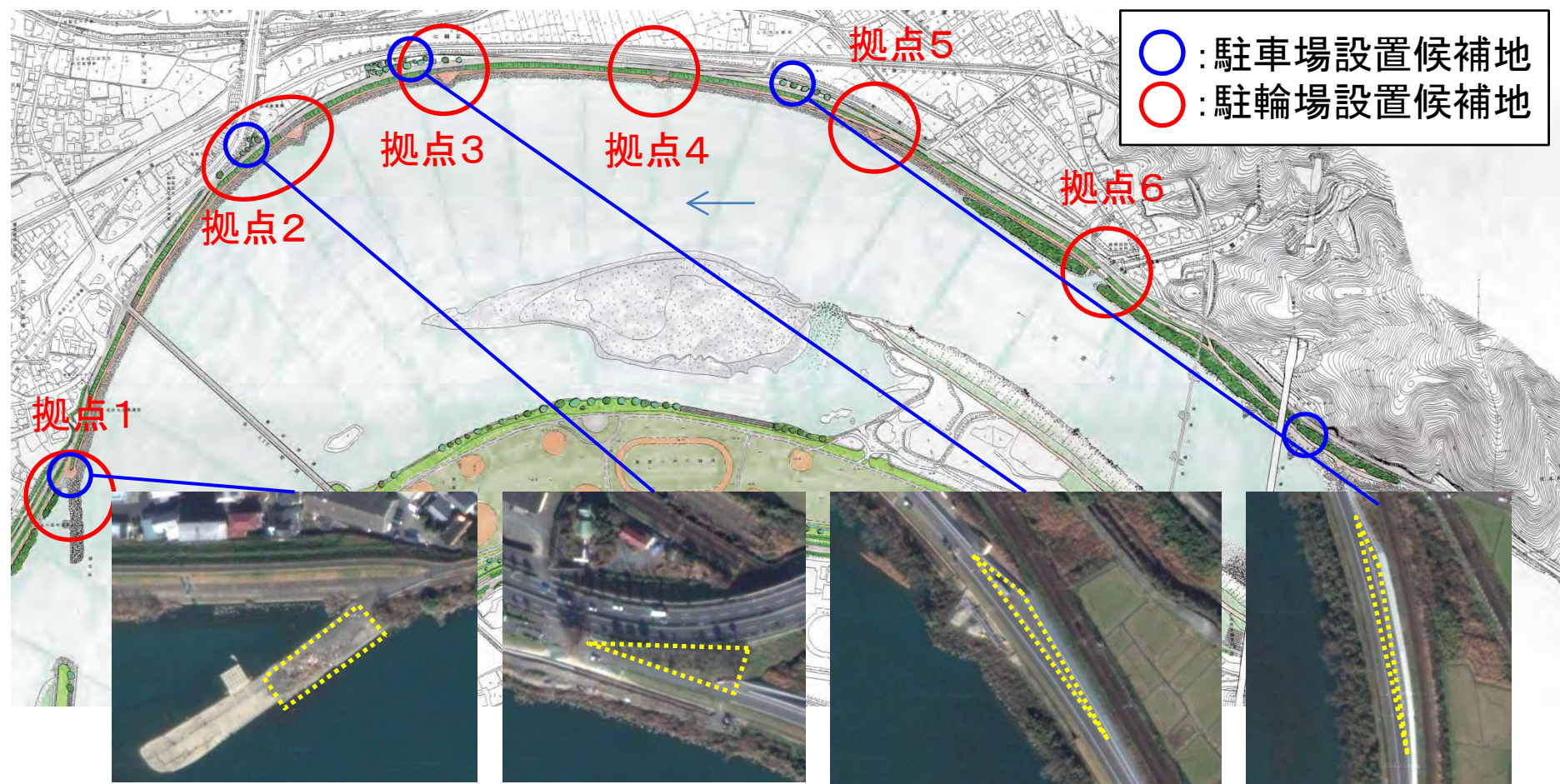
【具体的な方策に関する意見】

＜右岸(萩原堤防)＞

- 萩原堤防に安全な通路や駐車場がほしい

施設整備方針

- 9-1 自動車でのアクセスに配慮して、拠点に近接した位置に駐車場を整備する。
- 9-2 各拠点には自転車利用者のための駐輪場を整備する。



10.乗船場

全国花火競技大会やくま川祭り等のイベント時の利用に配慮したデザインとする(利用)

近隣の教育施設の多様な利用に配慮したデザインとする(利用)

10-1 遊覧船、屋形船、筏、ボートなどが離着岸できる施設を下流部の拠点に整備する。

地元意見

【具体的な方策に関する意見】

<花火大会>

- 花火大会の時に屋形船があるとよい

<くま川まつり>

- 球磨川をくま川祭りのメイン会場にしたい
- くま川祭りの筏流しを復活させたい、くま川祭りの筏競争が復活するとよい

<水面利用>

- 市街地を流れる球磨川を活かし遊覧事業ができるとよい
- イベント時に屋形船、観光舟をだしたい
- ヨットの練習場として利用できないか

<ボート>

- 舟係留場を右左岸にほしい、ボート発着場が艇庫近くにあるとよい
- 右岸にボート引き上げ場と坂路がほしい、階段護岸を緩くしてほしい、ボートが出しやすい護岸形状にしてほしい
- 階段護岸が土砂に埋まらないようにしてほしい
- 上流までボートをこげる水深がほしい
- 中洲を掘削し直線コースを確保したい

<その他>

- 1年を通して季節毎に球磨川でイベントを行いたい

◆ イベント等の利用状況(八代くま川祭)

- 球磨川の自然の恵みに感謝する、市民総参加の行事。全国踊りコンテスト、がらっぱ音楽祭(ストリートミュージシャン競演)、フリーマーケット(夜店市)、子供みこし、大人みこし、総踊り、イカダ乗り競争大会、納涼花火大会、くま川祭りクリーン作戦などが行われる。



かつての筏競争(球磨川堰湛水区域)

◆ 既存のボート乗降場所の状況

- 左岸側豊原河川公園にある階段護岸は、階段の踏み幅が狭く、ボートの上げ下ろしや乗り降りに使いづらい。



- 規格艇基準値(日本ボート協会)

種類	長さ	幅	全幅	深さ
男子シングルスカル	7.900m	0.270m	0.420m	0.162m
男子ダブルスカル	9.400m	0.330m	0.445m	0.201m
男子舵手付クオドルプル	12.800m	0.480m	0.510m	0.250m
男子舵手付フォア	12.800m	0.480m	0.510m	0.250m

施設整備方針

10-1 遊覧船、屋形船、筏、ボートなどが離着岸できる施設を下流部の拠点に整備する。

